

巻頭言——生活世界の平安保守

Preface: Peace Conservation in Living World

人々それぞれに人生の幸せを求める生活世界がある。個人を超えて、家族、村や街の地域社会、都市、民族、国民国家、国際社会、地球にまで、生活世界の広がりはその人の現実的な暮らしの範囲から、心の中に築かれる世界観にまで拡大する。個人の人生観もこの世界観に依拠し、自ら見たことのない伝聞や学習による原子、ミクロの生物、熱帯降雨林、生態系、地球ガイアを超えて、さらに太陽系、遙か彼方の宇宙にまで広がり膨潤する。最近では、インターネットによって一瞬にして時空を越えてしまい、現実世界と仮想世界がないまぜになって、その境界が薄れてしまい、判別がつかないほどに一体化してしまったようだ。

社会を構成する個人の生活史にこだわるのなら、自らの生活世界をどの範囲と知って、それを保守点検して人生を送るのか、これが最大課題だ。生活世界を保守するためには、これを侵害する物・者からの自衛は必要だ。行政や軍事組織の一員ではなくとも、個人として正面から真摯に議論し、市民組織としても、くにを平安保守する自律的な活動を心がける必要がある。

生活基盤の環境保全こそが最重要である。科学の還元論的リアリティ、またバーチャル・リアリティを批判的に部分否定しながら、一方で、環境学の全体論的直観、また想像力ファンタジーを部分肯定することだ。ヒロシマ・ナガサキ、ビキニ（原子爆弾・水素爆弾）から、スリーマイル、チェルノブイリ、フクシマ（原子力発電）に至る科学技術の結果事実から学び、直観し、想像力を働かせれば、今から変わる準備トランジションにはいらなければ、悲惨を平安にするために必要なゆったりした時間が逃げてしまいそうだ。自然災害と人為災害に応じながら、

平安保守するためには、自然に還る野外活動を一時でも心がけ、自然と寄り添う暮らしを学び続けるべきだ。

大都市に暮らしていれば、生活基盤の自然を忘れて、金銭を巡って世界が動いていると誤解してしまう。人間が自然から遠ざかり、里から街に後退し、都市に引き籠ると、自然の野生は空白になった場所に戻ってくる。里に野生動物が下りてきて作物を食害、人を襲うようになった。電気柵がないと畑は維持できない。町にも野生獣は行くようになった。ハクビシンは街中の塀の上を歩き、光ケーブルを伝って悠然と移動する。極端には福島原子力発電所公害で、居住困難な無人の街には、数年のうちに野生獣が跋扈している。その子孫は放射性物質で汚染されていた。すでに遺伝的変異を示す昆虫などもいる。植物や微生物も同じだろう。

辺境はいつでもフロンティアである。パーマカルチャーの提唱者の一人であるホルムグレンの言う「辺境」、周縁には生活の純粋な本質と美のかけらが今でもたくさん散りばめられている。山村という辺境に暮らす山民の素のままの美しい暮らしから、都市民が学び、思い出すべき経験の蓄積は多くある。

これは過去の思い出ではなく、未来に必要な伝統的生活知識や技能である。「神は細部に宿る」から派生した Beautiful is in small（「美は細部に宿る」、建築家ミース・ファンデルローエ）は、Small is beautiful（シューマツハ 1973）に相通じると思う。

自然文化誌研究会はいつも辺境にてパイオニアワークを続けることを忘れてたくはない。

黍稷農季人（2016.7.16）

